

FOCUS Next

多様な治療とオンライン診療により 北海道全体の泌尿器科医療に貢献



佐藤 嘉一 先生 社会医療法人三樹会 三樹会泌尿器科病院 理事長・院長 (北海道札幌市)

泌尿器科単科病院では全国有数の99床を有する社会医療法人三樹会 三樹会泌尿器科病院。手術実績は大学病院にも引けを取らず、近年は手術支援ロボットの導入やがん薬物療法の拡大をはじめ、新たな取り組みも目立ちます。オンライン診療で泌尿器科医不在の病院の支援にも乗り出すなど、泌尿器科専門病院としての存在感はますます高まっています。

単科病院では限られる 手術や薬物療法も積極的に

多様な泌尿器疾患に質の高い医療を提供

三樹会泌尿器科病院は、泌尿器科単科病院として1978年に設立されました。現在は11名の医師が在籍し、麻酔科医を除く全員が一般社団法人日本泌尿器科学会の認定を受けた泌尿器科専門医です。理事長兼院長の佐藤嘉一先生は、「どの医師も泌尿器疾患にオールラウンドに対応していますが、得意とする領域・疾患は異なります」と説明します。同院では前立腺肥大症、尿路結石症、ロボット支援手術、泌尿器がん薬物治療、男性更年期障害&EDの5つのセンターを設け、それぞれの治療に精通する医師をセンター長に任命しています。センター長は各疾患の治療方針を示すなど、その領域におけるリーダー的な役割を担っています。

佐藤先生自身は男性更年期障害&EDセンターのセンター長を務め、一般外来に加え、「メンズピークス Men's Peaks」と名づけた専門外来で週2回診察をしています。「年を取ると衰える一方と思われがちですが、この先の人生にもう一度ピークを、という思いを込めました。願わくは二度、三度ピークを作ってほしいということで複数形にしています」と佐藤先生。専門外来のキャッチフレーズは「人生にワクワクを!」です。

前立腺肥大症の治療に低侵襲の術式

前立腺肥大症の治療では、電気メスを用いた従来の術式に比べて患者さんの負担が少ないとされる経尿道的ホルミウムレーザー前立腺核出術(HoLEP)の豊富な実績があり、

直近5年の平均は約120件となっています。そうした中、2022年からは新たに経尿道的前立腺吊り上げ術(ウオリフト)と経尿道的水蒸気治療(WAVE)を開始しました。特に後者は2022年の4件から、2023年は89件と大幅に増えています。佐藤先生は、「麻酔のリスクが高い、前立腺が小さいなどの理由で既存の手術方法が適していないと考えられる患者さんにも、外科治療の選択肢を示せるようになりました」と説明します。

手術の質の向上だけでなく、術後のケアにも注力

泌尿器がんの外科治療では、2024年3月からロボット支援手術を開始しました。コスト面から泌尿器科単科病院での実施例は限られますが、手術支援ロボットを導入しない考えはなかったと佐藤先生は振り返ります。「前立腺全摘除術に代表される泌尿器がんの根治術は、低侵襲で患者さんの負担がより少ないとされるロボット支援手術が標準になり



病院のビジョンは「人に優しい泌尿器科医療」。患者さんの気持ちに寄り添うことを大切にしていると佐藤先生は語ります。

つつあります。それができないとなれば、当院の泌尿器がんの外科治療は縮小していかざるを得ないという懸念がありました」

ロボット支援手術で最も症例数が多い前立腺全摘除術では、神経の温存を試みても性機能に障害が残ることがあります。しかし、術後のケアに力を入れている病院は、北海道はもとより全国的にも限られます。そうした現状に鑑み、同院では術後の性機能障害をケアするプログラムを実施しています。「ロボット支援手術に関して当院は後発です。手術の質を追求するだけでなく、当院ならではの強みが必要と考えました」と佐藤先生。ロボット支援手術の件数は2024年3月1日から8月1日までの5カ月で100件を達成するなど、順調に実績を重ねています。

近隣の病院と連携し、がん薬物療法を拡大

がん薬物療法に関しても、大学病院や一部の総合病院を除き、泌尿器科単科病院ではあまり行われていない治療も実施しています。安全かつ安心して行えるように、看護師らの教育を徹底し、副作用発現時の対応についても、近隣の総合病院や皮膚科クリニックと連携するなど万全の体制が整えられています。「大学病院や総合病院で標準的に実施されている薬物療法は、当院でも同じように提供したいという思いがあります。より多くの方が泌尿器がんの標準治療を受けられるようにするには、単科の病院もその一翼を担う必要があるというのが私の考えです」と佐藤先生は語ります。

札幌から新しい泌尿器科医療を発信

過疎地のニーズにオンライン診療で応える

札幌市をはじめ都市部と地方の医療格差がたびたび指摘される北海道では、泌尿器科医が不在のエリアが少なくありません。同院では、これまでも道北の稚内市や豊富町の病院に医師を派遣し、外来およびオンライン診療を行ってきました。2024年4月からは、新たに道東の町立中標津病院との間で定期的なオンライン診療を実施しています。

月2回は同院の医師が町立中標津病院に出向いて対面で診療し、残りの2回はオンライン診療で対応しています。オンライン診療時は、町立中標津病院の診察室の患者さんを画面越しに三樹会泌尿器科病院の医師が診察します。セキュ

リティが確保されたクラウドサーバーで運用し、遠隔での電子カルテの閲覧や入力、エコー検査なども可能です。手術が必要になった場合はいったん三樹会泌尿器科病院に入院し、術後は再び、対面およびオンライン診療でフォローアップします。佐藤先生は、「私自身もそうですが、アンケートの結果を見る限り患者さんも話しづらさは感じていないようです。画面越しでも問題なく視診ができるほど画質もクリアです」と手応えを語ります。

医療の質のさらなる向上に向けて

同院では現在、新病院の建設工事を進めており、2024年度内の完成を見込んでいます。新病院は病棟の個室を増やし、4人部屋も現病院よりゆとりを持たせました。病室はナースステーションを囲むように配置し、患者さんの状態を確認しやすくなっています。外来の待合室には待ち時間を表示するシステムを導入する予定です。

入院、外来共に快適性や利便性の向上が図られる一方、佐藤先生は「ハード面だけでなくソフト面、医療そのものの質を高めていくことも大切です」と気を引き締めます。「当院では、手術の際に従来の術式をベースに一部で異なるアプローチや切除の仕方を試みる場合があります。実際に手術時間の短縮などが図られた症例もあるのですが、その妥当性の検証やアウトカムの評価を行い、できる限り学会発表や論文投稿につなげていきたいと考えています」と佐藤先生。新病院完成後の展望について、「札幌から新しい泌尿器科医療を発信したい」と力強い決意を示しました。



「北海道は広く、泌尿器の専門医が不在の病院も多いので、そうした地域にオンライン診療などを通して自分たちの泌尿器科医療を届けたい」と佐藤先生は話します。

POINT

- 2024年3月から開始したロボット支援手術の実績は5カ月で100件に到達。
- 近隣病院との連携の下、単科病院では実施例の少ないがん薬物療法も提供する。
- オンライン診療を通して、泌尿器科医が不在の地域の医療ニーズに応える。